

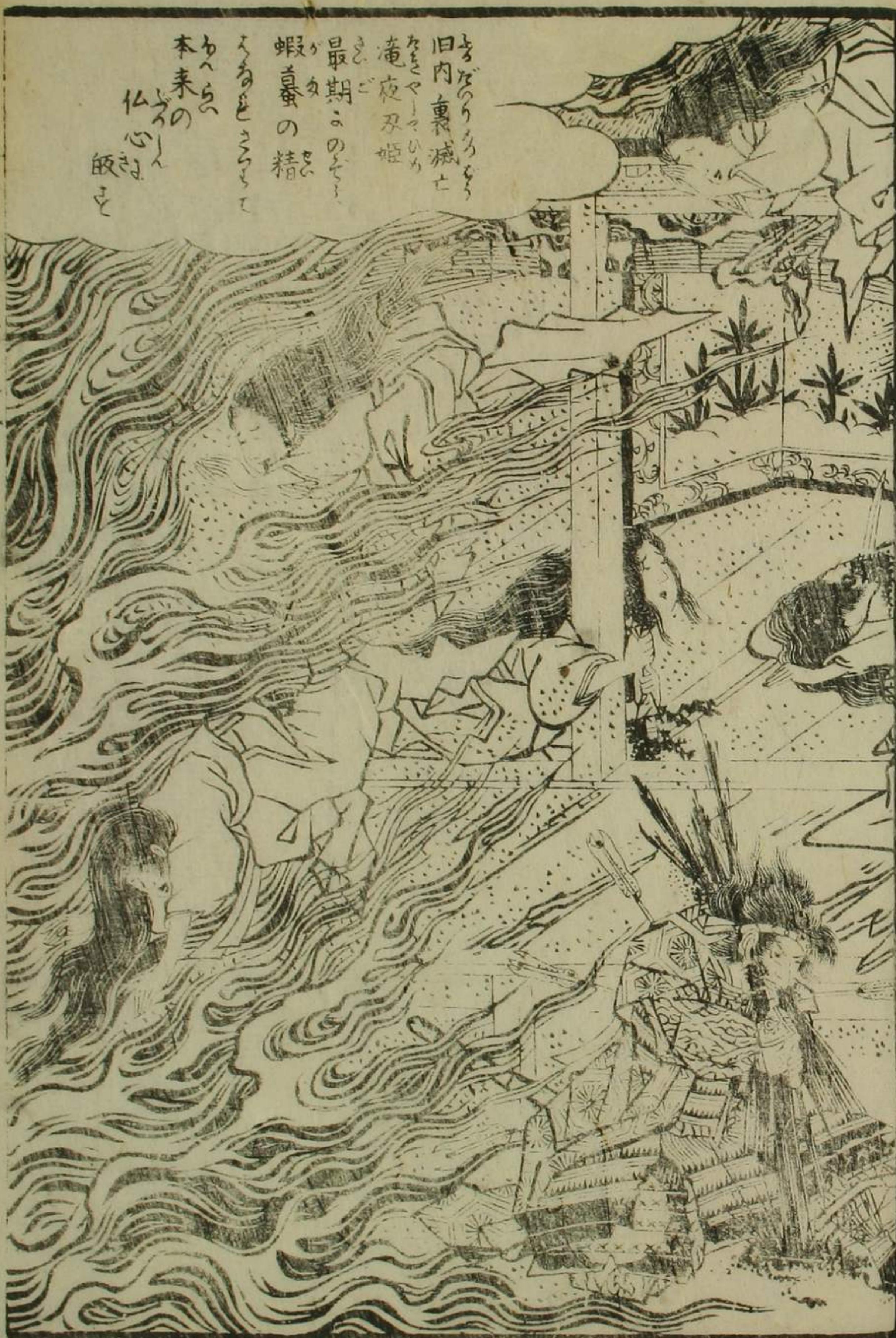


1305
8

戸の四方ふ横うて累々たり郊原の妙す。此時の野衾魔丸御從風蠻六山鷦呀助等三人も腹切ぬ。西木屋早太い生死あれどアモ。

緒
絶 橋
第十九條

四も折しも官軍の惣大將精兵とひそみて大庭狹りとこも入ぬ。大將の打扮いふと乍らバ赤地の錦の鎧直垂ふ。唐綾威の鎧の金物重く打たず。二透同めなく着下て。龍頭の五枚甲の吹返ふ。日光月光の二天子と金と銀みて耀達してあると。精項ふ着成し。當家累代の重宝ふ麗切云け。金作の圓鞞の太刀ふ豹の皮の尾鞘ひけたる三尺六寸の小太刀以帶添。鞍の本白と以て作たり矢三十六指たると。苦高ふ負成白瓦毛の馬の大く還き。小籠龍膽と金貝ふ磨たる鞍と置厚子總の鞞の燃立計をうけ。火の影ふ耀し。光渡りてぞそくたりけ。つまもく。立ふるゝ三花やふうす。



大將韓つ不ふら杖つき。それへ多田の新發意子。水冷泉院の判官代原頼信
から。朝敵將門の餘類と征伐とづれ旨。勅命以てかうとせむ。生捕
て都へびえんへ安けれども。まことう姓のことあれ。繩目の耻とうとも情なし。
もく自害の事とよどよびひけ。大將の左右ふあそびし。譜代の家臣。
加藤豊後二郎忠正。坂戸九郎兼則。後藤三郎則經。加藤太夫親孝。首藤五
郎公清が輩あつ。滝夜刃姫声す。とて。ある口とや殘念や我神功皇后
のためふあそひ。自鉄鍔とさまで万國が征伐し。亡父の宿恨とそぞろを
大儀を企ほる。小事半はしてあづり。誠是運命のつむき。所へたも
此死へ死きうしも一念の惡灵とあうて天下と乱す。おづれうとのひて丈
なる黒髪あくとたうて。そぞろ小たちのがて。柳眉とさまたで星眼
とみひくに。牙と歯と拳とふくとて。そどりあぐと飛あぐと雨のごとく

とくひる火花のうち。小怒狂形勢。おもひし。我女ふ生じ。このでも
猛将の胤あり。いそゝ男子ふおとく。將門。娘の滝夜刃。最暮の体へ
やくありしと。后日の詰柄ふせよ。也といひ。錦の袴衣とねじと。上着の両
袖ぬけゆがて。水やりを短剣と枝をなす。雪とあわしく白綾の肌着のうへ
とく。股腹ふきとつまむ。立あづり。切目長く。立あづり。血ちる泉の
ごとく。口をりぐれて。紅の袴とりうと。あうそひぬ。左右ふつとそひた。侍女等
これとそそ一度ふ呀と泣り。或へ劍と吹ふつとたゞ。お伏もあり。或へ
掌と合せ念仏す。猛烈のうち。不飛入て。うらうも。あう。げふ。これ
阿鼻叫喚。大焦熱のあくとく。目の前ふくえて。哀なり。時ふ怪哉。滝夜
刃姫の胸向よと。一道の女氣立のぎ。ツの蝦蟇あづりと。空中不飛入
り。うづぬ。本末の菩提心ふ坂一。これまづの積悪露。うづぬ。うづぬ

か、かえど、何、也、自、殺、セ、ー、こと、ぞと、さう、うり、ぶ、うそ、けり。かう、そ、こと、と、し、ゆ
苦、痛、と、お、が、そ、を、忽、直、指、人、心、の、深、味、と、大、悟、ー、結、加、跃、坐、ー、眼、と、そ、ざ、て
一、頌、と、唱、て、曰、

閃、電、光、擊、石、火、

眴、得、眼、

已、蹉、過、

と、唱、が、う、そ、を、ゆ、う、が、ご、と、遷、化、ー、ち、る。折、も、天、井、焼、落、て、そ、く、姫、の、戸、灰、灰、灰、
灰、と、き、ふ、け、り。是、乃、因、是、仙、蝦、墓、の、妖、術、と、以、て、姫、の、胸、向、そ、り、け、入、種、この、暴、
惡、孤、を、き、し、う、け、り。姫、宿、善、の、果、報、あ、ふ、よ、そ。最、期、子、の、そ、そ、て、蝦、墓、を、と、
た。忽、三、義、三、菩、提、の、本、心、不、皈、ー、り、る。そ、そ、官、軍、姫、の、戸、灰、灰、と、す。
証、と、正、し、れ、ぬ、み、り、ぬ。せ、ん、そ、べ、く。荒、猪、九、首、と、して、太、刀、の、こ、う、と、み、る、
と、う、な、れ、凱、歌、と、嘆、と、あ、げ、た、う、り、る。折、も、夜、風、烈、く、吹、布、て、炎、の、れ、を、

黒、烟、の、うち、小、懲、ち、り。宮、殿、樓、閣、暫、時、の、うち、ふ、尽、く、燒、失、て、鹿、も、の、
を、き、ふ、く。此、時、夜、い、已、ふ、あ、け、な、き、け、と、ば。賴、信、公、兵、七、城、廣、原、ふ、ひ、き、
そ、し、あ、ぐ、く、人、馬、の、息、絶、休、り、と、ひ、ぬ。そ、そ、此、時、の、子、細、と、な、ぎ、ぬ、ふ、朝、
敵、そ、の、ひ、か、お、う。野、伏、浪、人、ど、も、と、つ、ぐ、ふ、集、て、こ、り、り、た、女、將、と、む、ふ。
大、軍、以、催、そ、の、無、益、あ、り、そ。百、姓、原、ふ、命、じ、て、銅、發、煩、を、放、應、め、ぐ、
の、路、鳥、城、そ、の、ゆ、ふ、相、置、の、狼、烟、と、ほ。山、ふ、明、松、旗、捺、物、と、あ、び、し、大、軍、
の、も、も、も、す、ふ、ろ、り、せ、て、敵、城、お、び、や。小、勢、と、ゆ、て、打、取、へ、皆、賴、信、公、の、
計、策、わ、う、と、そ、志、し、ね、ぎ、内、裏、ふ、火、と、う、け、い、何、者、の、所、為、そ、と、大、将、と、は、
ゆ、く、し、る、と、け、所、ふ。一、人、の、若、者、白、布、の、ち、巻、し。赤、糸、の、腹、巻、の、う、ふ、
黒、小、袖、着、て、袴、と、た、く、く、と、な、が。ち、ね、首、七、ツ、ハ、ツ、腰、の、ま、ら、と、ふ、く、そ、
け。全、身、血、ふ、と、あ、る。一、人、の、手、弱、女、の、振、袖、の、小、袖、着、て、緋、の、袴、の、も、ま、



源の頼
信公大宅の太郎
光國夫婦分忠孝貞節を
感ドウム賞賛

ひきあげたつ。錦の袋ふたり。剣アのりのと抱むと立ちひて馳来り。の
首城大将の前ふたりにて兩人ともふ平伏を。大将を滅ぼして汝等の
何者モ反忠の者なり。かとのこす。がの若者のや左みをへりと。君お見
知ありまこと。某ハ父滿仲公不快へまじ。大宅の左衛門光雅。子同太
郎光国とす。者ふりん。父光雅。満仲公の御勘氣と。も。浪との
房と。先だうてオマウシ。生涯のうち御勘氣の御ゆきと。うけさ
ことと深く歎き。我死后小波一功とたて。御ゆきとをくと。今般時ふじ
のじゆのゑ。何と。一功とたて。心掛け。此間内裏不妖怪とむと。やまと
うとと。うけあり。実の妖怪。うとば退治して人民のうひとのどき。若又將
門の餘類。なまの所為。うとば。タゞ。捕て微功。ふせんと。此所ふまをとらうと
け。果して将門が娘のうり。うらうれい。うりと味方ふつた。まつ眞深

探。ア。そんと。る。うち。幸。これ。り。某。妻。侍女。の。うち。ふ。交。居。て。が。ひ。て。ま
け。お。き。る。抜。完。あ。そ。と。告。が。れ。茅。軍用。ふ。た。く。火。葉。と。奪。う。て
あ。え。め。る。抜。完。小。地。雷。火。と。仕。ひ。け。あ。皆。殺。ふ。せ。り。と。計。ひ。折。り。も。銅。發。燒。ひ
き。目。鉢。あ。り。て。君。御。弊。と。む。け。五。様。子。か。ね。ば。さ。く。も。よ。れ。折。る。謀。計。暗。不。合
一。ぬ。と。在。び。妻。と。放。出。一。觸。手。よ。と。逃。出。る。敵。ど。如。此。打。う。て。戦。の。おり。
待。ひ。と。の。妻。唐。衣。そ。の。尾。ふ。つ。き。の。ま。き。お。目。え。て。つ。め。つ。め。ど。妻。へ。き。家。士
藤。六。左。近。ゲ。娘。唐。衣。と。者。ふ。ん。ど。し。父。お。手。打。ふ。き。し。后。あ。ぐ。の。夏。支
ど。き。め。と。わ。ら。光。国。が。妻。と。か。り。又。も。あ。ぐ。の。夏。目。ふ。あ。ひ。て。つ。ひ。ふ。始。月
尾。ふ。そ。う。れ。此。旧。内。裏。ふ。移。り。て。侍。女。の。うち。ふ。く。り。て。逃。出。へ。と。手。段。か。け
じ。は。非。う。夏。月。日。と。か。う。と。ふ。も。と。夫。ふ。再。会。し。奪。ふ。と。こ。な。陰
の。太。刀。と。取。ふ。と。の。ど。出。ひ。と。語。て。が。名。劍。と。大。將。の。尊。覽。ふ。と。あ。へ。け。を。

光國さとふ水元野川少て。羽太九四郎が首とえつけ。その口の裏より出
たり。將門と慰毛祭文の脣と盟脣の起請文の脣と同筆。ちりどりり。
て、かわきを妻。唐衣此所ふあらんと悟。にしや果て夫婦再会の時を得たり。
がの西脣へ共ふ荒猪たが筆跡やうととぞ。がくと頼信公夫婦が物語を云々^を
きれ。すそへあらあらけり。我敵を女とあるどりまくらの計へありまどと
るひつふ汝。若技穴をふきがむれ我かれ等は打りとまること必定なり。是
汝が大功されば我父満仲。ふうづり。光雅。勘氣とゆゑとぞと。加藤太夫。本
金ト。一紙の赦免状をかしづと与へけぬ。光国これと押ひて。亡父が冥
と慰もす。千部万部の経陀羅尼。すも。ちくふまくたぬりりつらそ。
懐中より光雅の位牌をこうと出。免状をたむけて頼信公の仁心と感。し。
ホー涙不むせびける孝心のをど。ふひ下れて哀なり。頼信公唐衣小む

え。我藤六と手打ちふりたことと爲后悔。せうて汝等がゆくとたゞぬて
家とほざあらんとおひしが。ひふたづぬあくゞぎ。日來これと愁つ下今日
えとど汝ふあひし。正是藤六が靈魂のみちびれたるふうとがひな
世ふまれあら忠臣を失へ。我一生の誤きとこそ。落涙ふ鎧の袖とゆ
されけれど唐衣も其志と感して共ふ涙をおじけ。頼信公くまよひ
光國ふむうひ今とうとおうためて汝を我家來よし。ましく忠勤と勵
よ。藤六が家と。他日再與し得さと。ビこのころ方あるくのゆひ。当坐の
力にして銀作の太刀一振をひくれけれど兩人感謝して義がことせう
か。光國又ゆしける。滝夜刃姫。弟將軍太郎良門と名告。今越中立
山ふたそらり。此御勢ふ乗ド。ふひてがくふ軍とむけられて。御
征伐あれし某御奉。公始ふ御先付。人とやせ。大将其儀志をまべーと

同意して。ひづかに出陳の支度などをせんれり。

此後光国唐衣がまふ男子出生し。其児成長して大宅光任と名告
頼信の子頼義。その子ハ惣太郎義家二代小仕へ安部貞仕征伐
奥州十二年の合戦不比類。おにをなにして義名を千歳小傳なるを
がく子孫忠義の勇士のぞれたる。正是光国夫婦が忠孝貞節世
みをぐせたふより。天地神明の擁護しゆく所とあらどる。

小鶴池 第二十條

爰又良門ハ越中立山下引籠野伏浪人どもと追々味方みへけ。合戦の
營の外他更き。専す戰場なり。之の調練して月日とかく。りぢ。頃一も
弥生半みて。山くの櫻今と盛されば花残ちがみて。脅を散
じよ。寿太郎がともあふと。小賊どもとあきびて。そもじよに所ふり。岩上

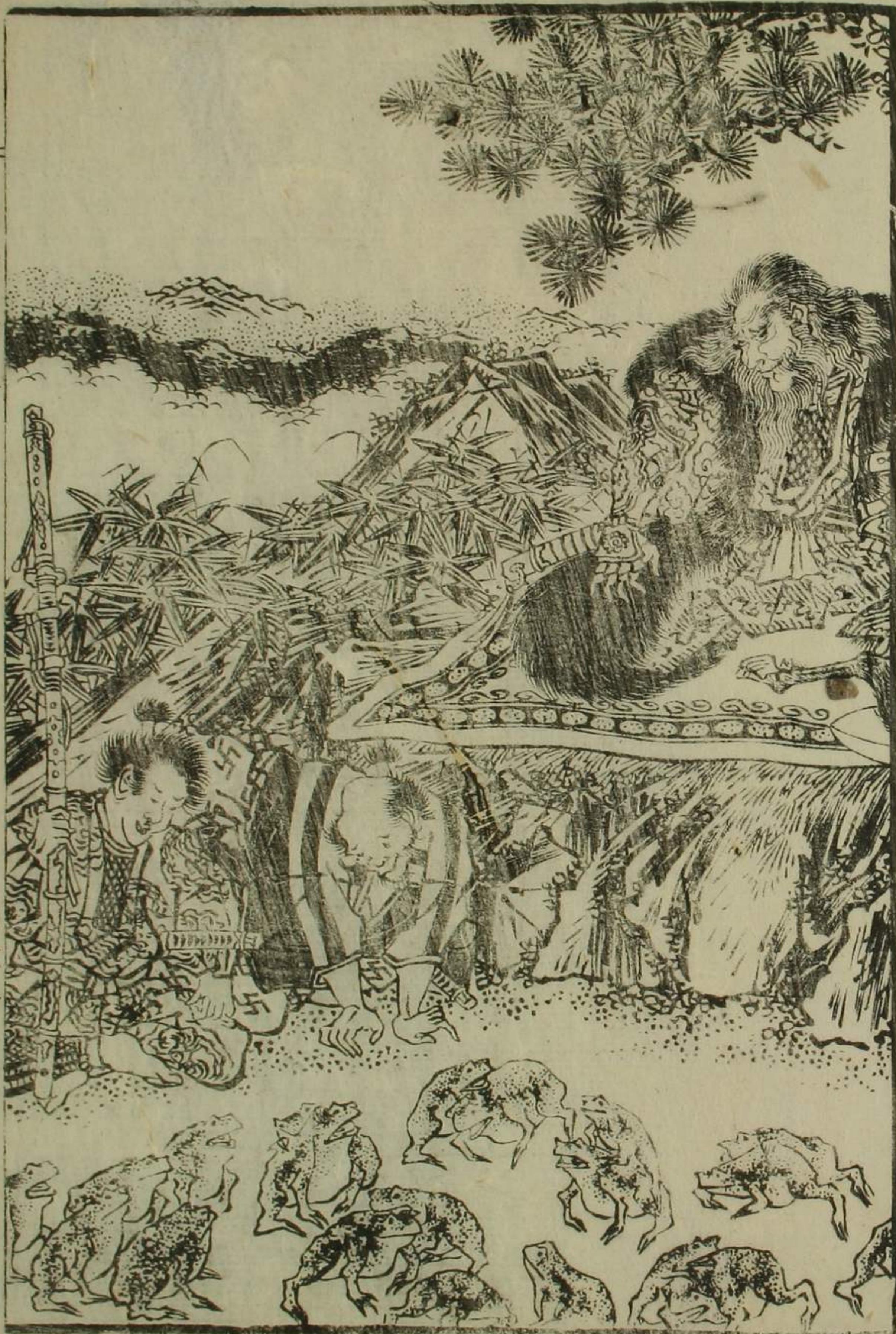
み毛蟹とあたは。良門へ猪の皮のあきりの上せ坐。伊賀大内ハ多
かくよふ事も野風呂櫻子吸筒提重などたゞきて酒宴
岩下丸一味の輩。小賊等大勢ある。居て或ひ清水城にて飯とか
木の葉焚で酒とあくわ。或ハ斧ふのひして獸とども枝ふ禽鳥と射
て看ふをうるやど。折節の一奥ある。此日晴明の天氣。空ふ塵
アメ雲もなく。遠山波頭の下。手下の者ども。ふもあくべて大み入奥。はる伊賀寿
がむ。松杉の緑も花ふる。りれて。えものそれぞ好景。なる。良門伊賀寿
とくも。ふ敵面試ひ。手下の者ども。ふもあくべて大み入奥。はる伊賀寿
醉ふ乗。某御肴。み昔風と。一舜。舜はと立よ。太刀ひ。技て免の頭
とま。さきみほりぬれ。

戈鎧。剣戟を拵こと雷光のごとく。磐石嵐吹瓦を。春の雨み

相同。然まつてのども。天帝の身より近づく。修羅がれが為ふ破らる。己をやうとすけと葬けぬば衆人共とやめたり。此うひもの等肉く。國えられても后みおりておのれらは才みる。大み不吉の詞なり。良い。うちもく奥みへ我も一魂と施して斯をみて。權眼をとる。咒文を唱へ印をむかへば忽岩石鳴動し。前面の小石ひくと動くとそへ。やうて数百の蝦墓と化し。左右み列して敵味方をつち。魚鱗す。あり。鶴翼。えもひく。とども上り飛上して。くひ合ひれば血張ス。これ代えておな奇妙の術。ゑと感へ。あひぬ。伊賀寿。たゞ。泰兼平二年御父侍に召と純友殿。同時。母在京。一ふ。比睿山みのを。根本中堂の前母。宴て遊び。玉ノ一が。さう。平安城を見ゆ。始て大儀を整し。立ひ本意と遂べ。將門君ハ王孫。幸ハ帝室。是や。純友殿ハ。藤原氏。タリハ。國白。

り。と。兩将浦。一。五。と。引。今。君と某と此蝦墓の圍を。そ。盃を。ひ。え。の時の趣。よく仰なり。君帝王となり玉。某。國白と。ひ。し。さう。よ。蝦墓の圍。され。幸のト。左を。遊び。玉ノ一が。さう。平安城を見ゆ。始て大儀を整し。立ひ本意と。遂べ。將門君ハ王孫。幸ハ帝室。是や。純友殿ハ。藤原氏。タリハ。國白。敵不。ひ。て。勝負の吉凶を占べ。そ。まだ。れも。せ。見居。た。と。蝦墓。ハ。ま。も。く。ひ。或。へ。ひ。こ。う。と。倒。ど。た。を。飛。越。て。も。じ。り。あ。り。或。手負の足。ば。く。ひ。と。退。く。も。あ。り。そ。み。一。群。サ。と。一。群。ヒ。ミ。レ。下。み。あ。ひ。つ。と。ヒ。つ。争。ひ。血。だ。り。け。り。と。倒。ど。た。を。飛。越。て。も。じ。り。あ。り。或。て。ひ。り。右。の。方。の。大。将。と。お。下。さ。大。蝦。墓。と。ひ。ろ。と。地。上。み。を。と。其。餘。蝦墓。ハ。こと。ぐ。り。の。小。石。と。な。り。み。く。良。門。これ。を。屹。と。え。そ。持。た。盃。伏。撲。地。と。お。じ。の。み。ゆ。一。た。多。い。あ。い。し。き。く。味。方。手。ひ。も。と。大。將。の。く。殺。じ。へ。時。み。う。り。て。の。不。吉。そ。り。旧。内。裏。お。か。手。と。妍。う。の。才。の。う。え。び。へ。ま。

將軍太郎良門は
術をもて姫暮の
力をはじめ伊賀守
太郎將門純友
平安城を是れら
大儀をくふと
昔のどうと

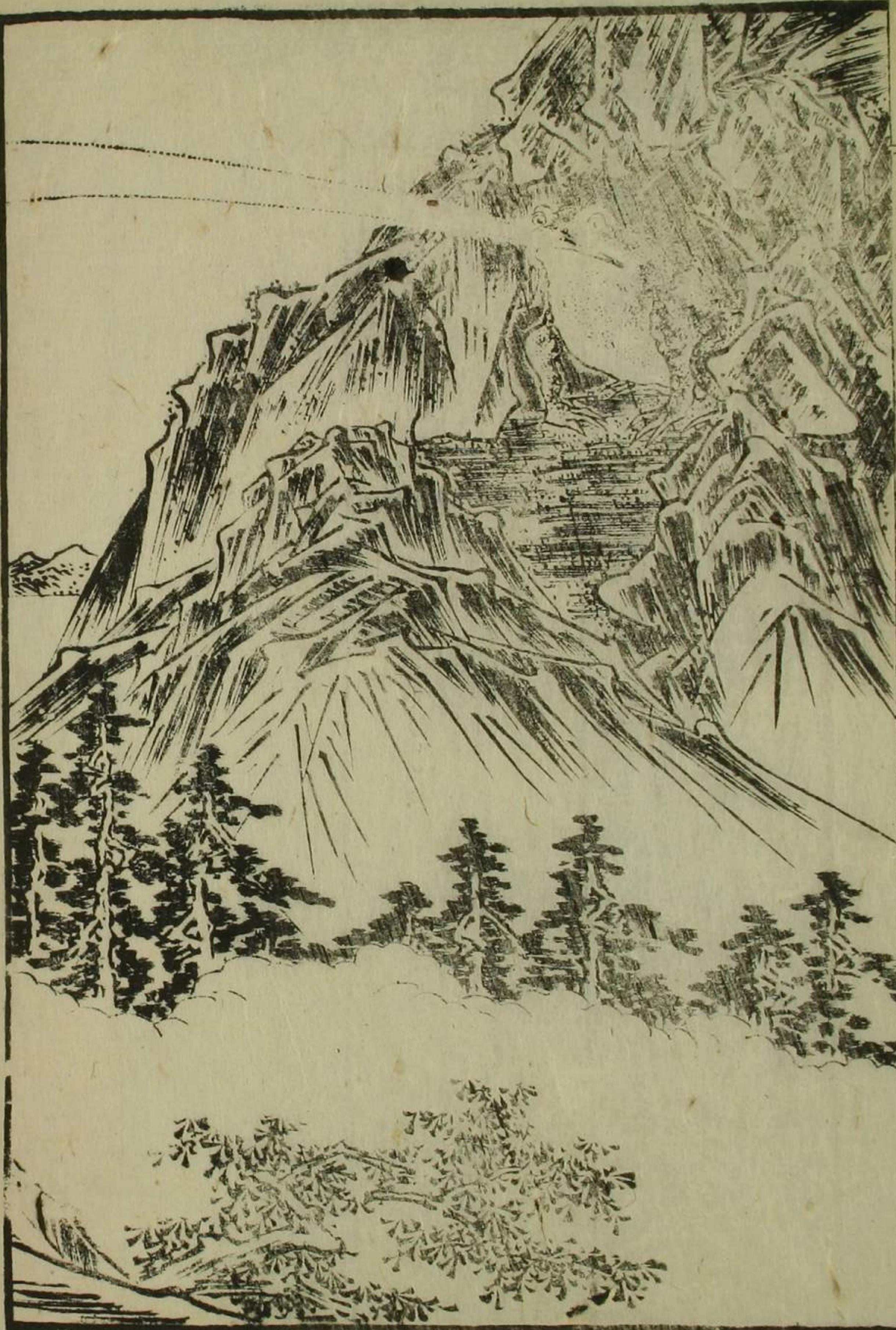


いまどひもどり下總と早打にて栗風早太雜鎧着て陳笠
をうち。飛ととくみじうき大息つゝて申しけられても一昨夜淹夜刀
姫花の宴ひにとくへ夜飲を催めす折とも敵方のましより大宅
の太郎光國こうこくを者頼信よしのぶ小内通ちうないつう。相あの石火矢せきかやをもうちて四方
をかきぬけ抜穴ぬきあなみ地雷火じらいを仕しりて宮中みやなかを一面の火とほりば姫君
をかきぬけ抜穴ぬきあなみ地雷火じらいを仕しりて宮中みやなかを一面の火とほりば姫君
をかきぬけ抜穴ぬきあなみ地雷火じらいを仕しりて宮中みやなかを一面の火とほりば姫君
をかきぬけ抜穴ぬきあなみ地雷火じらいを仕しりて宮中みやなかを一面の火とほりば姫君
逃出とうしゆつをあふことあらず。つひ半はん腹はらをれひ荒猪あらゐをそとおにして一味の
名なく。まふうちまふうちをを死死。或も自殺じそく。侍女童しやくじゆうみゆきまで猛火のうちうちを飛といて
面おもて或も打死ひじき。或も失う。某早走そぞろはして身達みたつと幸さい一方を斬きぬけ夜通よと
のくくを不ふろび失う。某早走そぞろはして身達みたつと幸さい一方を斬きぬけ夜通よと
升のぼ馳かけ參さん御ご註しゆ進すす侍しり。途中とちゆうみをうけありゆべ頼信よしのぶ大軍だいぐんを起おこと
当あ山さんみをせむひよ。御用ごよう心こころあふべ。息いきもつつあるをのべたをくふ。
良よ。伊賀いが壽じゅをほしゆくして。すく居ゐひ。非ひ車くるま唯ただまられまふととひりき。

口くちをそぐそ者ものもあらず。けちも良よ。怒氣こき天あまみさうのあらず。眼まなこの色いろ血ちの如ご
赤あかくちと。その面おもて或も青あおくちと。或も紅あかみ変かわる。頭かしらの汗あせ相あわのごとくみたつのち
のちと。炎ほののことと息いきぬつぬつそとのひけり。隠謀ひもう半はん身みと露あらわ頭かしら。姫ひめく
自じ害がいあらう。本ほん望ねがげ。此こ方ほうよと半途はんとみ出でて。官兵ひんひんみひえ
合あ。頼信よしのぶをつづみ殺いた。生膽いのちをくとひて。姫ひめくの修羅しゆらの妄執もうせきとときを
登の。伊賀いが壽じゅ軍ぐんの用意ようびせよ。もやくもやくさせせせせて。太刀たてかかううて飛と
のそんともを。伊賀いが壽じゅかか。御ご憤ふんり。理りやいども。王位おういをのぞむ御ご
承うけゆ。卒そつ尔まか軍ぐんを起おこ。あれ。御ご思慮しりょ淺あさみ似そ々そ。一旦いつこども。萬物まんぶつ
ちちし。諫いさを同ひと入いり。もく當とうの敵てきをそなへ。何安間なまと過すぎて。汝な同ひと
心こころがが我わ一人ひとりもせむ。頼信よしのぶを皆みな殺いたととくをんをんどど。あれ

ありて已みをせのとーたり背後の方み。アレをやまう良門。高をし
くとり声ある。良門屹と立とらねば肉芝仙雲中より下りて岩上
みをす。寛然にしてゆく。我如月尼が胸間みつけへて仏戒をす。
俗も一そ汝み力を合させつるが彼宿善の果報いじく苦提
心滅せざれ。まづつきまとことあらひ。最期みのことを本来の
仏心み立たる。彼頼信が為み亡しも因縁のあらむ。心より所す。笑
ひんともよふ。今官兵みむひ合て軍せん。石を抱て淵みへが如し。
うちあらがめ大儀いほ。唯もあらびて時運のゆきを待じ。
我まただらて茨木童子み命。頼光主従をあらがさんとそろにしが。
つひみ茨木渡辺源次綱が為み腕をもととて卒さ命をもととまぬ
くぬ。又洛中み妖怪をあらへて人民をなぐ。今上帝の不徳と

のを。且頼信が行跡を乱して自滅せんとをもとし。も藤六左近が忠義
ふよりて更をえけれど皆是時のひきよぎり。あらりこのどり我別小葛
城山の土蜘蛛命と頼光と。さん計策ある。汝一旦此所滅おちて
九州を渡る。又味方と集時運到来と待て軍と起らし。
志る時ハ天下を奪んこと安らん。あすとも今卒示ふ軍と起を
ことなくれ。又再会の旨あり。じとひ終り。やがて雲み乗じて飛去り。
かくて良門肉芝仙の教示みよりて。やがく憤をあらひ。あち行ひ。ふく
心と決。けしが伊賀寿太郎のとく。某が手下の阿蘭梨太郎とやまと
者木曾の山中み寨とひきよて引籠り。君小賊茅の半と召與され。
に時もあらかじ。うち行ふ。某ハ小賊茅の半とも不跡み残り。ぐん
器兵具をこうとさん。山寨を焼失て。あとす追付す。あらかじ。あらかじ。



かの地ちみ御足タケ立タケめらき。それより便たすて方カへ御越カツありしに伊豫いよの熊山くまやま又また澤太郎さわ。今張六郎さなえ。讃岐さんぎ又また高松たかまつの蛇九郎へび。同弟熊尾くまおの新六紀しんろく伊国いのくに又また田邊たのべ。一族いちぞく三十七人さんじゅうしじん。播磨はりま国くに法花山ぼけさんの架け。沙農太郎さうのぶ。備前びぜん小射越原こひきこはら。今木いまき。備中びっちゆ又また松山まつやまの荒四郎あら。肥後ひご国くに又また尾道おど。六郎ろく。安藝あき国くに又また金剛十郎こんごう。蓬屋ぼうやの四郎よしろう。周防すい小国屋こくやの程五郎よしろう。長門ながと国くに又また萩えの勘六かんろく。同金地丸きんじまる。梅根父子うめねふくし。杉兄弟すぎだい。第茅だいを首くびに。三道の張本ばりもと百六十三人ひゃくろくじゅうさんじん。其外一族いちぞく從類じゆるひ。又またあらうらふいといと。都是純友殿じんゆうでんの恩おん。ばうけう者あがもたれバ。味方みわがふづんふづんハ必定じてきなり。されば良門よしろう。あらうばとこどもおち支度しどをう折く。俄そ小族こぞくのよそ不ふひと。ゆゑりづくへ御越カツ。あらうも自由じゆうふして小こうして俄そ。俄そ小族こぞくのよそ不ふひと。ゆゑりづくへ御越カツ。あらうも自由じゆうふして小こうして俄そ。俄そ良門よしろう。あらうばとこどもおち支度しどをう折く。俄そ暴風ばうふう。俄そ來くわて。さあくと梢こしをかうじ。善知安方夫婦ぜんちあんぱうの靈魂れいこん忽然ぜんぜんとあつれそ

軍ぐん。忠企ちゆうき非望ひぼうを御みどもまことにされば。憤ふるに御心みや。うそて死し御み所存しよそん。と數かずつゝもむとも良よ門もん。されをえて又また來くわし。執念深しおいなき。奴原ぬはら。条大儀じょうだいぎの前折まへぬじの諫言けんげん。とく立たつくといひつ。力を枝えだて斬ね。松まつ。忽然ぜんぜんと鳥とりと化かして。もとほり。けみう。ふくや。とくとくと鳴なきて空中くうちゆう。飛と公こう。ね。わ。じ。とく。良門よしろう。伊賀いが。寿太郎じゅたろう。を告つげ。あゆくの小賊こくせきを。見みて。阿蘭梨太郎あらんり。が山寨さんさいを。うば。山さん。づ。ひの間道まんどう。みのくまで。から。かたりり。

○此後將門まさみやの妻桔梗きききの前まへ自害じがいて將門まさみやの恩おんを復おし。附つきて。桔梗ききき。原はらの来由らいゆ葛城かつらぎ山さんの土蜘蛛どじし。義女ぎじよみ化かして。賴光らいこう。ふらう。ほれ。つひ。四天王よんてんのうの葦草いのしょ。とく。大宅おおや。らくふらう。こと。はし。いが。とく。良門よしろう。伊賀いが。寿太郎じゅたろう。共とも。山陰さんいん。陽よう。兩道りょうぢ。を。そ。九州くしゆ。み渡わたり。ま。味方みわがを。あ。ろ。播州はりま。三石みついしの奥おく

永柵ながさきをひそへて立龜多田の城かじを文ふり。頼光頼信の武德ぶとくみとくを安
術あじゆママと永延三年三月二十六日渡辺源次綱つな子生捕うぶて誅戮しゆりくせよ。更
伊賀寿太郎誅しゆみ伏ふ。良丸道心源賢阿廻梨の道徳どうとくみより肉
芝仙蝦しばせんか蟇か墓はかの術じゆをびとて滅亡めつりやう。靈魂石と化かすみこと蝦蟇石と称めいる
夏善知なつぜんち子千代童母の敵老熊ごじろうゆうとモ孝行の徳とくみよりて源家の臣おほり。
富貴榮花ふきえいはをこよひむむ古又附つけて夏善知夫婦忠義貞節の功德こうとくみよりて天堂
小生こまこと歡乐かんらくを定さだひ。夏将門良門父子地獄じごくみよして无限の苦痛くほうをうる
夏庵夜よ姫冥途めいとを於おて將門良門まさかね りょうもんにみあひひ返かへむ。夏源家繁昌の夏不
至いたままで總て善報惡報ぜんぽう おふくじょうの速はやき例たと恐慎きようしんのみ理りを述べて後編五冊ごさつふ詳く他
日銚ひちゆう杯はいの時ときと俟ま得とくて看みべ

作者 山 東 京 傳

校閱 山 東 覽 山

善知傳卷之五終大尾

附

安守あんじゆ小將門の事跡じしきハ義徳の古書こしょ將門記まさかね きを證あてとし。又將門純友
東西軍鑑とうざいぐんかんある。前太平記ぜんたいへい將門の一條いつじょうおいく。此書しじょより出で或もハ帝王編
年記ねんき扶桑畧記ふざんらうき平治物語へいじぶつご平家物語へいけぶつご東鑑とうかん盛衰記せいさい太平記たいへい等とうの諸
書しょみ往むかく畧記らうきを良門の事跡じしきハ前太平記ぜんたいへいみまとにく錄れきせり。の書
ハ近世の書しょハハとぞ。たたくく実じつももおももええががしし。此草紙くさしきハ良門の
由ゆ多たと大路おおじ。善知と云謠曲うようくの趣おもを徑へとと。夏なつ狂きょう
言ごん綺き語ごみみうけうけほほももたり物語ぶつご。ればれば尽つくくくそそト言いふふて歌うた
舜じゆ妓ぎの狂言ごんごんみみひとひと。兒女こどもの徒然とてん狂きょう慰いもろののひひ。唯ただ善人ぜんじん
一旦いつた衰おとるこののどど再な時じ運うんののひひくくみみああひひ惡漢おがん一旦いつた盛さかりり。もも
つひひのの天刑てんけいををつうう。善惡ぜんご到いた頭かしら。かかど報ほうあり道理ぢをを示し。

露ぢうり諸悪莫作の便とも成ぬじとおりふのせうてよこある
がとうそ。都是童の昔語ゆく雲の跡あーごと根ちー草の根
かーこと見るーたゑひゆ

醒 醒 齋 京 傳 識

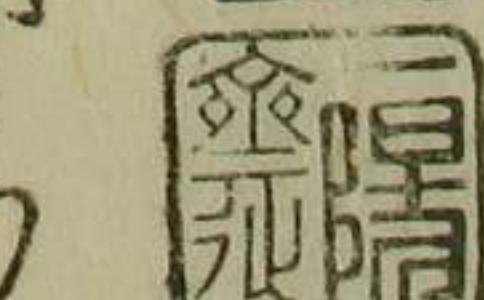


東都一陽齋歌川豊國畫

剗 利 氏 小泉新八郎刀畫

同

平八郎刀畫



醒 醒 齋 山東翁著書目錄仙雀堂藏版

全部十卷出来

全部五卷出来

全部七卷出来

全部五卷出来

骨董集 好古漫錄ノ書ナリ

全部三卷近刻

- 繪本忠臣水滸傳
- 全復讐奇談安積沼
- 全優曇花物語
- 全櫻姫全傳曙草紙

朱子讀書記 清人覺世道人傳方椿壽齊并田信明製 一包一多五分
小兒無病丸 ○小兒氣血の氣の蒸やうそうの包百十二文
小兒無病丸 ○小兒氣血の氣の蒸やうそうの半包五文

賣弘所江戸京橋
山東京傳烟艸合店

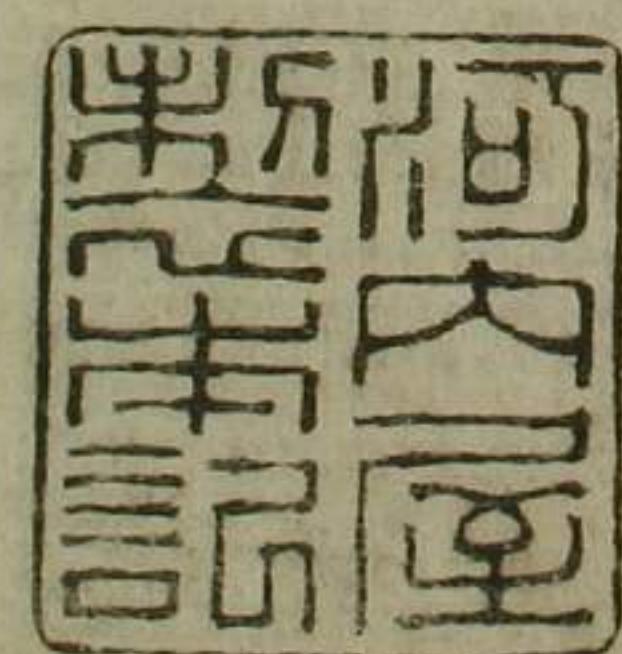
山東先生岩瀨氏本姓辯田名田臧字田臧一號醒齋舍東都洛橋南朱提街恒著稗說以寓誠詣舉人呼京傳子郎狹巷頗靡弗口之而若其名氏間亦有弗詣者因詳標榜編尾云東都書舗僕鶴堂小林近房欽識

文化三年丙寅冬十二月収兌

江戸通油町

書林 鶴屋喜右衛門繡梓

群玉堂藏版



大阪心齋橋通博勝町四百十七番地

因田茂兵衛



